

## 『ソドムとゴモラ』におけるショパンとプッサンに関するエピソードの位置について

吉川 佳英子

### I. はじめに

「ソドムとゴモラ II」において話者は母と共にバルベックへ2度目の滞在に出かける<sup>(1)</sup>。彼はそこでピュトピュス夫人の小間使いに再会したいと心の中で願いつつ、アルベルチーナと共に暮らし社交にもいそむ。

この滞在では海を前に、話者を囲んでお客達は芸術を話題におしゃべりをする。彼らの芸術に関する見解は様々なだけに、そのおしゃべりはしばしば熱を帯びる。招待客達の中でも注目すべきはカンブルメール若夫人とその義理の母であるが、彼女達は互いに正反対の芸術的好みを見せる。若夫人は近代芸術に共感を示し、老夫人はクラシック好きという具合に。従って、彼女達のやりとりはさながら芸術論争のごとくである。

さて、草稿を参照すると、プルーストはこの異なる芸術観をめぐるやりとりを、話者の2度目のバルベック滞在の場面に組み入れようと小説構想の当初より明確に計画していたのではどうやらないらしい。もっと別の場面に設定する可能性がどうもあったようである。推敲の諸段階を経て、最終的にはバルベックの2度目の滞在場面にやはり組み込むのが適当とプルーストは判断したようであるが、果たしてこの場面は最適な位置だったろうか。

この論文においては我々はまず、カンブルメール二夫人の間の芸術をめぐるやりとりが当初、どの様な場面に挿入される可能性があったのかを知り、そしてどの様なプロセスを経て決定稿のようなバルベックの場面の中に定着されるに至ったのかを理解することによって、カンブルメール若夫人と老夫人の芸術

談義のおもしろさを再確認したい。そのために、話者の2度目のバルベック滞在の海辺のこのシーンは一体、どの様に作られたのか、また、特に海辺での会話の部分がどの様に構築されたのか、を知る必要があるだろう。そういう目的で、我々は関係する草稿を参照していきたい。

## II. カイエ 46<sup>(2)</sup>を参照しながら

カンブルメール二夫人の音楽的好みの違いは既に、「スワンの恋」のサン・トゥーベルト夫人の音楽夜会において言及されているが<sup>(3)</sup>、『スワン家の方』の出版後は、ブルーストはカイエ 46の中で、再びこのテーマを取り上げる。実際、カイエ 46の75ページ裏の欄外に、彼はバルベック訪問の描写の中に、カンブルメール若夫人の嫌いなショパンが意外に最近、再評価を受けている等の音楽に関するメモを書き加えている。

カイエ 46のこのあたり、すなわち66ページ表から76ページ表の、1914年から1915年にかけて書かれた箇所は、カンブルメール家の人々のグランド・ホテル訪問の下書きに当てられている。ただ、これらのページには若夫人がブッサンよりもモネやドガの方を好むなどの美術についての好みは明かされていても、音楽の方面に関する好みは言及がなく、先に挙げた75ページ裏の欄外の加筆においてのみ触れられているにすぎない。それでは、その欄外の加筆を引用してみよう。

[<sup>o</sup>75 v<sup>o</sup>]<sup>(4)</sup>

<Je crois qu'il faudrait mettre dans cette visite Chopin pour Chopin dire en symétrie avec Swann : Depuis quelques années la musique de Chopin avait retrouvé sa gloire. Même les amateurs dont le goût est difficile pouvait l'aimer sans honte, les plus raffinés, les plus grands de nos jeunes musiciens le faisaient. Mais Me de Cambremer n'était pas encore informée. Et polonaises et nocturnes avaient encore gardé à ses yeux leur déguisement sordide et surmené et Debussy (je pourrais

peut'être parler de l'odeur des roses sur la mer dans Pelléas) et du regard soulagé et reconnaissant (qui me fait penser au titre d'une pièce *Latude ou Vingt ans de captivité*) ou à l'air des prisonniers de Fidélio que me lance la vieille Cambremer car je crois qu'on n'aura plus l'occasion de la revoir.><sup>(5)</sup>

カイエ 46 の小説執筆のこの段階では、我々にはまだ、この加筆中のショパンに関する断章がどの様にテキストの中に組み入れられるかは明らかではない。また、決定稿とは違って、プルーストはこの加筆中にはっきりと二夫人の好みの差を明示している訳でもない。この部分がより練り上げられるのを目にするには、その次の段階を待たねばならないだろう。

### III. カイエ 72<sup>(6)</sup>を参照しながら

1915 年頃に書かれ「ソドムとゴモラ II」を形成するカイエ 72 は、カイエ 46 に続く草稿であり、とりわけ、ラ・ラスプリエールの夕食の場面や小鉄道のくだりを含んでいる。

ラ・ラスプリエールでのヴェルデュラン主催の夕食会の場面<sup>(7)</sup>では、カンブルメール若夫人は、シャルリュスが連れて来たフルート奏者になにか演奏してもらおうと話者に話しかけるのだが、ここには決定稿とは少し異なる記述が見られる。それはカイエ 72 の 12 ページ裏に書かれている部分に当たるが、若夫人は老夫人とは違ってショパンの音楽を評価しない旨や、彼女は老夫人のことを有能なピアニストと見なさないことなどを話者に語り始める。12 ページ裏のその部分を引用してみよう。

[ ♯12 v° ]

Madame de Cambremer pendant ce temps m'interrogeait sur le flûtiste ayant vu qu'il était lié avec M. de Charlus. Elle m'interrog[ea]it méditant comme je le compris de venir le faire jouer à la [blanc] dans l'intention d'attirer M. de Charlus. J'espère

qu'il jouera après le dîner me dit-elle. On pourrait lui demander dis-je, car Mme Verdurin m'a dit que c'était dans son répertoire, un arrangement pour flûte de deux nocturnes de Chopin. Madame de Cambremer fit ~~en faisant claquer ses~~ rapidement avec ses lèvres le même petit bruit réprobateur et répété que j'avais déjà entendu quand j[e] à-B[albec] quand à Balbec je lui avais parlé de Chopin. "Vous vous entendriez bien avec ma belle-mère me dit elle. Et comme parler légèrement de sa belle-mère ~~faisant partie~~ était chez elle une drôlerie coutumière : Je sais que ma belle-mère passe me pour une très grande pianiste. ~~Elle joue Chopin à ravir. Moi~~ Moi je ne la trouve pas musicienne du tout. Elle ne comprend rien à Wagner à ni à Debussy à Fauré. On dit à cela qu'elle joue Chopin à ravir. Mais comme je ne trouve pas que Chopin soit de la musique, je ne vois aucune différence entre le jouer mal ou bien. Evidemment elle a des doigts, elle perlera tous<sup>(8)</sup> ses traits, elle passe ou il faut." "Mais ~~Debus[sy]~~ Chopin est un des musiciens que Debussy et Fauré aiment le plus dis-je : Me de Cambremer à l'égard de laquelle j'~~avais adapté~~ continuais à suivre ~~une~~ la méthode défensive qui m'avait si bien réussie à l'égard de Poussin. "Tiens c'est amusant dit-elle intéressée" comme si ~~il y eut eu là un brillant~~ et mes cette opinion de l'auteur de Pelléas n'avait été qu'un brillant et insoutenable paradoxe.<sup>(9)</sup>

この部分を読むと、我々はプルーストがヴェルデュラン主催の夕食会と、別の場面とを混同しているのではないかとの印象を受ける。と言うのも、ここで若夫人が話者に語る老夫人のショパン好きは実際、決定稿においてはバルベックの海辺の場面で展開される芸術についてのやり取りの中で延々語られるものだからだ<sup>(10)</sup>。ヴェルデュラン主催の夕食会と決定稿のバルベックの海辺の場面は従って、カイエ 72 のこの段階では混同もしくは未分化な状態であったと言える。

このカイエ 72 における一種、場面の混同と思えるものは今まで余り指摘され

ることはなかったが、実際、注目に値するのではないだろうか。と言うのは、ブルーストはうっかりバルベックと夕食会を混同したというのではなさそうである。そうではなくて、もっと自覚的にショパンとプッサンをめぐる会話をヴェルデュラン主催の夕食会の場面にいったん、取り入れようとしたようである。そのことは、この12ページ裏の上方にブルースト自身が書き込んだメモから読み取れる。メモは以下の通りである。《*Il faudrait mieux mettre Chopin pendant la visite à Balbec et Poussin ici*》。

このメモが指しているバルベック訪問におけるショパンだとかプッサンというのは、ちょうど我々が先に引用したカイエ46の75ページ裏の欄外に付けられた加筆の内容を含むだろう。メモを考慮するなら、ブルーストはこの加筆の内容をその後に書かれたカイエ72のヴェルデュラン主催の夕食会の場面に取り込もうとしたようだ。それでは、バルベック訪問におけるショパンやプッサンについての会話をメモに従って、この夕食会の場面に置くことは果たして、適切で効果的なのだろうか。

確実に言えることは、カイエ72に描かれているヴェルデュラン家の夜会の場面でカンブルメール若夫人が自分の考えを話者に述べるのは、あくまでも社交的会話の枠組みのなかでであって、自分の芸術観を披露し老夫人を批判するにしてもこの社交の雰囲気彼女を多弁にしているようである。そういう点では夕食会のこの場面も不適當と言う訳ではない。

ただ、カンブルメール若夫人がショパンに加えてドビュッシーに言及するにしても、例えば、具体的に加筆の中で触れられている『ペレアス』を連想させるような海を渡るバラの薫りというのはカイエ72のこの夜会の場面では期待しにくいから、若夫人独自の音楽における近代趣味もいささか展開しにくい環境のようではある。

さらに、この夜会にはカンブルメール老夫人は招待されていないので当然、ここでの若夫人と話者とのやり取りに加わることはできない。従って、カンブ

210 「ソドムとゴモラ」におけるショパンとプッサンに関するエピソードの位置について

ルメール若夫人の一方的な老夫人批判、もしくはショパン批判となっている。

この様にショパンやプッサンについての会話をカイエ 72 の中のヴェルデュラン主催の夕食会の場面に挿入することは、効果的な面もあるけれども、必ずしも適当とは言えない。

我々が先に引用したカイエ 46 の 75 ページ裏の欄外に付された彼女達の好む音楽をめぐる加筆の内容を自然な形で小説の中に実現するには、ドビュッシーの音楽を想起させ得る海辺の風景が必要とされるだろうし、カンブルメール若夫人のショパン批判は老夫人の反論を伴ってこそ膨らみを増すことだろう。

ブルーストもこの様に考えたのだろうか。決定稿に近い内容である次の清書原稿の中で、彼はショパンとプッサンに関するエピソードの位置を新たに変更するようだ。

I V. 清書原稿 (カイエ IV) <sup>(11)</sup>を参照しながら

[ ƒ°96]

Me content de ce qui était un commencement de rétractation puisque si elle n'admirait pas encore les Poussin, ~~elle demande et voulait délib[ration] demandait une se[con]de~~ s'ajournait ~~du~~ pour une seconde délibération ne se rappelait plus bien ce qui elle elle déclarait ~~du moins ne plus se rappeler ce qu'elle en pensait d'eux, et pour ne pas la laisser plus longtemps à la torture je dis à Madame sa belle-mère combien on m'avait parlé des fleurs admirables de Féterne. [...]~~ Je me tournai vers la belle-fille : "C'est tout à fait Pelléas lui dis-je ~~en me tournant vers Me de la belle-fille et pour me contenter son goût de modernisme, cette~~

[ ƒ°97]

odeur de roses ~~dans~~ montant ~~aux~~ jusqu'aux terrasses. Elle est si fort dans la partition que comme j'ai le hay-fever et la rose-fever elle me faisait éternuer chaque fois que j'entendais cette scène. [...]"Je sais que vous êtes une

[ 98]

gde musicienne admirable, Madame, dis-je à la douairière. J'aimerais beaucoup vous entendre." Madame Sa belle fille fait M<sup>e</sup> de Cambremer-Légrandin regarda la mer pour ne pas prendre part à la conversation. [...] Il est vrai que la seule élève encore vivante de Chopin déclarait «avec raison» que la manière de jouer, le "sentiment" du Maître, ne vivait plus q[ue] ne s'était transmis, à travers elle, qu'à les M<sup>e</sup> de Cambremer, mais ce n'était Chopin jouer comme Chopin était loin d'une être une référence pour la sœur de Légrandin laquelle ne méprisait personne autant que le musicien polonais, auquel elle refusait même le titre de musicien. [...] <sup>(12)</sup>

この清書原稿（カイエ IV）は 1916 年の春頃書かれたとされている。その内容は大体、決定稿における『ソドムとゴモラ』の「心情の間歇」からアルベルチヌとのドンシエール訪問あたりまでに相当する <sup>(13)</sup> のであって、自筆原稿のカイエ 46 の内容をベースにしていると言える。

上の引用はその中でもバルベックの 2 度目の滞在に当たる箇所的一部分で、丁度、カンブルメール老夫人とカンブルメール若夫人の芸術的好みの違いに触れられているところと言えよう。

カイエ IV は比較的、決定稿に近いとされているものの、例えばこの原稿には 97 ページにルコント・ド・リールの短い引用が見られる <sup>(14)</sup> が、それは次のタイプ原稿の中でいったん取り入れられた後に結局、線を引いて取り除かれることとなる。この様にこの清書原稿の段階では、決定稿との違いももちろん観察され得る。

さて、この場面では話者、カンブルメール老夫人そして若夫人の 3 人がバルベックの海を前に色々語り合う。ブッサン嫌いのカンブルメール若夫人が少し考えを変えようとしてくれたらしいことで話者がとりあえずはほっとしたり、ショパンのただ一人の生き残りの弟子というカンブルメール老夫人と話者との会話に若夫人が背を向けるという具合であったり、である。さらには海を渡る

風の薫りやら海に散らばる鴉、太陽の動きなどがモネの連作や『ペレアス』の一シーンを彼らに思い起こさせ、言わば会話にはずみをつけていることから、バルベックの海という「自然」の舞台設定の効果も軽視できない。

ところで、この清書原稿中の海辺の場面は、先に引用したカイエ 46 の中の 75 ページ裏の欄外の加筆の内容を取り込んでいることは言うまでもないが、カンブルメール若夫人のショパンの毛嫌いぶりやそこから生じる老夫人への攻撃を見るならば、これは上のカイエ 72 に書かれたラ・ラスプリエールでのヴェルデュラン主催の夕食会における話者とカンブルメール若夫人のやり取りをこれまた、踏襲していると言えるだろう。

ブルーストは、先の第三章で我々が確認した様に、いったんはカイエ 72 のヴェルデュラン家の夕食会の中にショパンやブッサンに関するエピソードを挿入してみたのだけれど、この清書原稿（カイエ IV）を創る段で、その案を白紙に戻し、どうやら、これらのエピソードをここに引用したバルベックの海辺のシーンに移そうと新たに考えたようである。これが今日、我々が決定稿の話者の 2 度目のバルベック滞在の場面で目にするカンブルメール若夫人と老夫人の芸術談義である。

## V. 結論

カイエ 72 の中には、決定稿におけるバルベックの海辺の場面の、その下書きの一つが含まれていることが確認される。ブルーストがカイエ 72 を書いていた頃、彼はラ・ラスプリエールのヴェルデュラン家の夕食会の場面の中に、カンブルメール若夫人と老夫人の芸術的好みの対立を描くつもりだったようだ。

しかし、この対立の図をより効果的に演出するためには、おそらく海辺の環境が準備されるべきであり、さらに老夫人の存在があることが望ましい。そのために、ブルーストはこの対立の位置を再考し、結局、バルベックの海のシーンに挿入することにした。

実際、海辺の風景は話者を囲んでの会話の展開に貢献してくれるうえに、カ

ンプルメール老夫人の存在は芸術談義をより活発なものにしてくれる。

そういう訳で、このやり取りはバルベックの場面に移されることにより、より良い結果を得られたと言えよう。そして、この場面が見直しを加えられるに従って、ここで展開される芸術評論は一層、体裁を整えるに至った。

プルーストはこの様にして、バルベックの場面に、芸術についての考察を効果的に導入したのであった。

#### 注

(1) *A la recherche du temps perdu*, édition publiée sous la direction de J. -Y. Tadié, Paris, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, t. III, pp. 148-152.

(2) Cote B.N. N.a.fr. 16686.

(3) *R.T.P.*, t.I, pp. 322-339.

(4) Cf. La transcription dans la Pléiade, t. III, p. 1085 (Esquisse XVII).

(5) Pour la transcription, les mots et phrases raturés par Proust sont barrés, les additions sont présentées entre soufflets.

(6) Cote B.N. N.a.fr. 18322.

(7) Cf. *R.T.P.*, t.III, pp. 314-316.

(8) Sic.

(9) Voir Yoshikawa (K.), *La Genèse des Cambremer dans A la recherche du temps perdu; esthétique et snobisme*, thèse de doctorat dactylographiée, Paris III, 1997, t. II, pp. 48-49.

(10) Cf. *R.T.P.*, t.III, pp. 208-210.

(11) Cote B.N. N.a.fr. 16711.

(12) Voir Yoshikawa (K.), *op. cit.*, t.II, pp. 78-80.

214 『ソドムとゴモラ』におけるショパンとプッサンに関するエピソードの位置について

(13) *R.T.P.*, t.III, pp. 148–248.

(14) [...] C'est aussi Leconte de Lisle : "L'aile du vent joyeux porte l'odeur des roses

Aux vieux Liban trempé des larmes de la nuit!"

"Quel chef-d'œuvre que Pelléas s'écria Mg de Cambremer [...]"

(Cahier IV, n°97)

Cf. "Notes et variantes" de la nouvelle Pléiade, t. III, p. 1460.

(京都造形芸術大学助教授)